

令和元年度第1回経営戦略会議 議事要旨

日時 令和元年8月1日(木) 15:30-17:30

場所 柏の葉カンファレンスセンター(千葉県柏市若柴178-4)

出席者 2ページ参照

<議事>

- (1) 開会 (15:30-15:35)
- (2) 議題 (15:35-17:25)
 1. 平成30年度第2回経営戦略会議 議事要旨確認 (15:35-15:45)
 2. 科学技術・イノベーション政策の動向の報告 (15:45-15:55)
 3. 若手研究者(理研-産総研「チャレンジ研究」)による研究活動紹介「高温動作シリコン量子計算機」 (15:55-16:15)
 4. 最近の取組について
 - ①産総研における Society5.0 への取組 (16:15-16:45)
 - ②産総研の広報活動 (16:45-17:25)
- (3) 閉会 (17:25-17:30)

<委員> (敬称略)

川本 裕子 早稲田大学大学院経営管理研究科 教授
榊原 定征 東レ株式会社 社友 元社長・会長／経団連 名誉会長
山海 嘉之 筑波大学システム情報系 教授／筑波大学サイバニクス研究センター 研究総括／CYBERDYNE 株式会社 代表取締役社長 (CEO)
田島 瑞也 スタック電子株式会社 名誉会長
中許 昌美 大阪産業技術研究所 理事長
松尾 清一 名古屋大学 総長
山西健一郎 三菱電機株式会社 特別顧問

(ご欠席)

内永ゆか子 特定非営利活動法人ジャパン・ウィメンズ・イノベティブ・ネットワーク (J-Win) 理事長
五神 真 東京大学 総長
野路 國夫 株式会社小松製作所 特別顧問

<産業技術総合研究所>

中鉢理事長、三木副理事長、理事、監事、領域長、他

＜会議の概要＞

今回は会議に先立ち、委員各位には柏センターにおける研究開発現場を視察いただきました。人間拡張研究センターにおける各チームの研究について簡単なデモンストラーションを含めて体験いただき、さらに ABCI をご見学いただきました。

1. 平成 30 年度第 2 回経営戦略会議 議事要旨確認

経営戦略会議のホームページで公開されている「平成 30 年度第 2 回経営戦略会議 議事要旨」の確認を行いました。また、平成 30 年度第 2 回会議のコメントへの対応状況について紹介しました。

2. 科学技術・イノベーション政策の動向の報告

経済産業省産総研より、産総研に関連する政策動向として、6 月に公表された「研究開発・イノベーション小委員会」の中間とりまとめの内容を紹介していただきました。

3. 若手研究者(理研-産総研「チャレンジ研究」)による研究活動の紹介ー「高温動作シリコン量子計算機」

「理研-産総研チャレンジ研究」の意義について山内理事より説明したのち、ナノエレクトロニクス研究部門 森貴洋主任研究員が「高温動作可能な小型の量子コンピュータを目指し、現在この原理に基づいて世界最高の動作温度である 10 K を達成している」ことを含む研究内容を紹介いたしました。委員からは将来の研究の発展に向けた期待が示されました。

4. 最近の取組について

情報・人間工学領域の関口理事より、「産総研における Society5.0 への取組」を説明しました。とくに産総研における個別の技術の組み合わせによりいかに新しい価値を生み出すか、という観点で AI データ連携プラットフォームを介したデータ・アルゴリズムの共有化に向けた取組について説明しました。委員からは産総研の Society5.0 への取組に対し強い期待が示されました。次に小原副本部長より、「産総研の広報活動」の取組について説明したのち、小林審議役から現在作成中の動画を紹介しました。委員からはストーリーテリングの重要性について賛意が示されつつも、論理性とのバランス、および企業への情報発信における取組強化の必要性が指摘されました。

<委員からの主なコメント>

- 産総研が Society5.0 への取組においてリーディングポジションを果たしているという意味では本当に心強く思っているが、Society5.0 が具体的にどのような社会になるのかを一般の国民や社会がわかりやすいように描けると、もっと国民を挙げた本当のプロジェクトになっていくのではないかと考える。
- 誰を対象とした広報であるかを考慮した広報活動を行っていること、また基礎強化訓練にも力を入れていることはよいことである。今後も万人に対する広報ではなく、目的を明確にした広報活動に期待する。
- 一般社会の方を対象とした広報とは別に、今後も産業界の方々にも見える情報発信をぜひお願いしたい。
- Society5.0 の世界ではデータ連携プラットフォームが将来必要になってくる。交通やエネルギー、医療など、分野によってプラットフォームの開発には時間差があり、すべてが同時に完成するものではない。そのような状況に置いて、プラットフォームの構築方針を示していただけるとありがたい。
- AI やデータ連携のためのプラットフォームについては、実現の方向であるという実感を得られた。Society5.0 のプラットフォームへ参加したい場合の参加方法について教えて欲しい。また、データを活用した成果事例が認知されていくと、連携する方向への良い流れが形成されると考える。
- 若手のチャレンジ研究は、とてもすばらしいと思う。国のプロジェクトは期限付きであり、長期間に渡る挑戦的なテーマを継続して完遂することが難しいと考えている。重要な研究が政策動向に左右されず、安定的に実施できるように支援する流れを産総研や理研が先導して作ってほしい。
- 日本には Society5.0 で活用できる良質なデータが豊富に蓄積されている。例えば、防災関連のデータを統合して解析し、課題解決に結び付けることができれば、大きな価値を生むことができる。一方、マテリアルズ・インフォマテックスのようなビジネスに関

連する事例では、企業に膨大なデータが蓄積されているが、それらを企業から提供してもらって横断的に連携することは一般的に難しい。基本的な考え方は、産総研の提案が良いと思うが、Society5.0 のプラットフォームの構築には戦略が必要であると考え